

Title	小關三英の自盡日に就て
Sub Title	
Author	國分(Kokubu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.26- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白錄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小説三英の自盡日に就て

十九日（〇天保拾年五月）の夕余は前田猪吉の歸途、蒲川に出逢ひたり。蒲川曰く、今日椿山の話に十六、十七の兩日は、呼出ありたれども、引合の高野長英行衛知れず（或大藩にて、長英をかくまひしとの事）依て吟味はなし。併し長英の外に若荷谷の醫者（姓名不詳）本所割下水の人（大塚蜂頭ならんか）召捕に爲りたり。此夜余は赤井巖三を訪ひたり。岩名昌山に邂逅せり。昌山尤も華山に親み、其娘は華山の門人なりき。時に昌山種々の談あり。長英出奔行衛知れざれども、恐らくは虛無僧寺に入りたらんか。少しほむ當りもあるよし。長英家内の者は、都て名主預けに爲れり。又戸塚靜海の話には、兩三日前備中守殿より、海野與介へ申さるるには、華山事は申譯無き次第なれば逆も赦免は六ヶ敷がらんとの事あり。奥村喜三郎も引合なり。其他遠藤克介も靜海方に度々來り、右の様子を聞き恐怖し覺悟を定め、小關三英は一昨朝自殺し、岡部家の門へは、他人の出入を禁じたり。下略尙註して曰く、「雜纂所載の御届書に曰く、内膳家來小關三英儀亂心仕候哉。昨廿三日夜及自殺候。右者天文方山路彌左衛門様、御役所へ罷出、阿羅陀書籍和解御用相勸候者之儀に御座候間、内膳正在邑に付此段御届申上候以上五月廿四日岡部内膳正家來、竹内多橋。左すれば三英の死は廿四日まで隠蔽しおきしならんか。（岡部邸は赤坂溜池）清水正巡「ありやなしや」抄出（國分生）

(註、小蘭三英は出羽庄内の人、蘭醫にして華山と交り善く時事を譯して之に與ふ。華山捕はるゝに及
び、三英亦執へられ、自殺す。世人その自盡日を天保十年五月廿三日となす。)